
東方屍生記

春夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方屍生記

【Nコード】

N9000Y

【作者名】

春夏

【あらすじ】

超バカな高校生が突然ダンプカーに撥ねられ死亡した。

だが、見知らぬ女性：星伽夜歌の手によって、ゾンビとして蘇った主人公。

そして、星伽夜歌は自分の物語の構成の為に、ゾンビになった主人公を幻想郷に送りつける。

主人公：和永明人が幻想郷で生き抜く物語。

1頁【始まり】

突然ですが、俺は一度死にました。

なぜ死んだかは、後ほど説明します。

そして俺は、幻想郷という世界で第二の人生を送っています。

第二の人生…どこぞの転生物語を生で実感するなんて思ってもみなかった。

…ってか、何だ？

この始まり方は。

まあいいや。

今は博麗神社っていう神社で世話になっています。

え？ どんな場所かって…？

一言で言うと、全く参拝客が来ない事で有名な神社です。

今、その神社の巫女さんに買い物頼まれての、帰ります。

人使いが荒いというか、胸が無いというか…見た目は可愛いんだけど、遣る事が全部メチャクチャな巫女さんの元で、生活しています。

どれくらいメチャクチャかと言うと、この数日であばら三本、大腿骨一本、上腕骨二本が巫女さんの手により、逝きました。

その巫女さんの入浴シーンを見た日には、首の骨が綺麗に折られました。

え？ なぜ生きてるかって？

それは…

「キャアアアアア！」

おっと、女性の悲鳴だ。

説明を後にし、俺は悲鳴のあった場所に駆ける。

駆けている途中、何度か人里で買った、買い物袋の中の野菜を落としそうになる。

一つでも落としたら、大惨事だ。

大変な意味で。

予想的中。

女性が妖怪に襲われている。

涎をダラダラ垂らした、厭らしい熊みたいな妖怪だ。

妖怪と聞いて、疑問に持つ人が居るかもしれませんが、幻想郷という世界は妖怪や魔法使いなんかもいる幻想的な世界です。

まあ、そんな事は置いといて。

その厭らしい妖怪が、鋭く長い爪の生えた手を振り上げ、女性に振り下ろそうとしている。

んな事、俺の目に前でさせると思ってたのかよ！！

グチャリ

女性の代わりに、俺がその鋭い爪に貫かれた。

四本の長い爪が、完全に俺の身体を貫く。

まあ、普通ならこのまま天に召されるんだろうけど、生憎、天国の

天使ちゃんにも、地獄の鬼さんにも嫌われちゃったんで、お迎えに来てくれないんだよな。

…っうか、超イテエエエエエ！！！！

説明できないくらいの痛さだよチキシヨウ！

女性が怯えた目で俺を見ている。

当然か。

自分を助けてくれた人が、目の前で妖怪の長く鋭い爪の餌食になっているんだ。

今にも失神してしまいそうだな。

あれ…何か忘れているような…。

あ！ 人里で買った野菜が、俺の血で全部赤く染まっちゃってるよ！
しかも、野菜がいくつか地面に落ちて、トマトやキュウリが潰れている！

…あゝあ、今日は俺の骨格が折れたキュウリのようになり、頭はトマトのように潰されるんだろうな。

不幸だ。

俺にこんな不幸を齎した熊のような妖怪には…帰った後の俺の状態にさせてやる！

カッコイイ台詞（全く格好よくないが）を心の中で叫ぶと同時に、妖怪が爪から俺を引き離し、地面に叩きつけ、女性を狙う。

俺には全く興味無しですか。

こんなに痛い目にあっただってのに。

許せねえ！

…まあいいや、これで自由に動けるし。

「おい、変態熊妖怪！ 俺はまだ生きてるぞ！！」

背中を向けて女性の方に歩き出した妖怪が、俺の方に振り向く。

俺が生きていた事に驚いたのか、妖怪が目を見開いて、バカのような顔になっている。

いつ見ても堪らないな。

俺を死んだと思ったバカが、生きて復活した俺を見て驚く様は。

その時、なぜか女性が俺の姿を見て、完全に失神した。

…え、どういう事？

俺の今の姿は女性から見たら、妖怪以上におぞましい姿なの？

…涙が出てきたよ。

まあいい…。

聞いて驚け妖怪。

俺は…

「俺はゾンビだぜ！！」

一世一代のカミングアウトをしてやった。

…あれ、そういえば…俺まだ名乗ってねえ！！

1頁【始まり】（後書き）

この度、オリ主の幻想入りを書かせて頂きました。

1話って事で、色々説明不足ですが、後々説明していきます。

因みに主人公はある小説の主人公に似ています。

2頁【幻想入り前】（前書き）

駄文極まりないですが、暇な方どうぞ。

2頁【幻想入り前】

あれは、学校から自宅への帰宅途中だった。

俺はいつも通りの帰り道を、一人で寂しく帰っていた。

なぜ一人かと言うと、期末テストで名誉ある学年最下位を頂き、賞として先生とマンツーマンで勉強をさせて頂いていたからだ。

お陰で友達みんな先に帰宅し、一人で帰るはめになった。

夏が近づいていたせいか、太陽がいつもより元気に活動している。

マンホールの上で卵を割ったら、目玉焼きが出来そうな程の暑さだ。

そんな中を、俺は自宅まで帰宅している。

人の通行はあまり無いが、車道を走る車は少し多い。

だから俺の横を車が横切った時に出来る風が、とても心地よかった。

その時だった。

俺の歩く歩道と、車が通行する車道の向かい側の歩道に、超美人の女性が俺に背を向け、歩いていた。

しかも、この気温だ。

かなり露出度の高い服を着ている。

どう露出度が高いのかは、皆様の御想像にお任せいたします。

そして俺は、その後ろ姿を齧り付くような、変態の眼差しで見えます。

きっと、俺の今の目を見たら、女性は「キモオ〜」と、言うでしょう。

その証拠に「何アレ、気持ち悪いよ」「きっと性犯罪者よ」という女性達の会話が俺の耳に入った。

予想していたより、酷い言葉が来るなんて思ってもみなかったよ。心が少し、傷ついた。

だが、仕方が無い事だ。

健全な男子校生なら、見惚れてしまう程の美人なんだ。

まあ、後ろ姿しか分かんねえけど。

：気付いた時には遅かった。

妄想という物は恐ろしい。

俺が後ろ姿の美人さんを眺めながら、色々妄想をしていると、いつの間にか車道に出ていた。

そう、足が勝手に美人さんの方に向かっていったのだ。

本当にバカですよね。

勿論、無事で済む訳がありません。

そこを通行したのが、單車や軽トラなら助かったかもしれない。んだが：運が悪い。

何と、俺の目に入ったのがダンプカーだった。

そこから先の、俺の未来は皆様でも分かるでしょう。

綺麗撥ねられ、痛みを感じずに即死でした。



それから俺は、天国に行けると思ったんですが、何故か真っ白い何も無い空間に居ます。

「…何処だ、此処？」

上も下も、右も左も、前も後ろも、全てが白。
何も無い。

ただ、この状況に意外に冷静な俺がいるだけ。

…天国では無さそうだ。

だって天使のお迎えが来ないし。

しかも、服装はダンプに撥ねられる前の学校の制服。

もし此処が天国だって言うんなら、俺は天国に革命を起こします。

…だったら、地獄か…。

いや、無いな。

俺はそれ程、生きている間に悪さなどはしていない。

…多分。

「ここは地獄では無いわよ」

突然、俺の背後から女性の声が聞こえてきた。

俺は振り向く。

さっきまで誰も居なかった筈なのに、其処には超絶美人の女性が居た。

キラキラ光っている様な長い浅紫の髪。

透き通る菫色の瞳。

服装は：巫女装束だが、緋袴ではなく紫袴だ。

巫女装束の上からは、透け透けの紫色の着物を羽織っている。
紫を基調とした服装だな。

：いやはや、鼻血が出そうなほどの美人だ。

つか、急に声を掛けられたせいで忘れ掛けたけど：俺の心を読んだ？

「あんたは何者だ？」

聞きたい事は色々あるが、まずはそれから聞く。

「私は星伽夜歌。ホシトギヤカ 君を蘇生した女だ」

：ん、どうリアクションするべきか？
悩むな。

こういう時って、過剰に反応したり、頭が回らなかったりするのだろうけど、生憎と俺はそんな素直な反応が出来ない。

「ふーん」程度しか反応できないのだ。

「おいおい、リアクションなんかで悩むなよ」

「ん？ やっぱそう思う。じゃあ、リアクションは面倒だから取らないな」

…あれ？

今も、俺の心の中を読んだ？

「読んだ。と、答えておこうか」

やっぱり。

「本当に何者だよ、あんた？」

普通の人間…では、無い事は確かだ。

「あんたじゃなくて、星伽夜歌だ。二度目は言わせるなよ」

「分かったから、俺の質問に答えてくれないか？」

「…物語を創りし者だ」

「物語？」

物語を創りし者？

聞いたこと無いな。

本とか書く人の事かな？

「ああ、率直に言おう。君には私の為に、ある世界に行ってもらいたい」

…違ったみたいだな。

この展開はアレだ。

前に読んだ、主人公が突然死んで、神様に生き返らして貰うって話。確か異世界転生って奴が結構有名だったっけ？

まあいいや。

「…うん、別に良いですけど」

少し興味が有ったから、引き受けてみた。

ってか、この状況でも冷静な自分が怖くなってきた。

「あっさりだな。君のような人間は初めてだ」

「んー、まあ、自分でも自分の事をよく分かってないから、答えられないや」

「そうか。では、引き受けてくれた君には褒美として、好きな能力を上げよう」

でたよ、こういう展開。

絶対にこうなると思っていた。

「何でも良いのか？」

「ああ。何せ私には？能力を作り出す程度の能力？があるからな程度？」

どこが程度なんだ？

そんなチートな能力が。

「作り出すか。死んだ俺を蘇生したのも、あんたの能力って訳か？」

「その通りだ。？生物を完全蘇生させる程度の能力？。私の225番目の能力だ」

いくつ能力持ってたんだよ！

自分で能力を作って、自分の物にしてるのか！？
なんちゅう馬鹿げた奴だ！

「因みに君の心を読んでいるのは、？心を読む程度の能力？。私の385番目の能力だ」

この出鱈目の数の能力の方が、リアクション取り易いな。

「…欲しい能力か…」

何でも欲しい能力ね。

「あまりチート過ぎるのは止めてくれよ。物語の作成として、面白みに欠けるからな。それと最高でも三つまでにしてくれ」

「そっか。なら、俺を不老不死にしてくれ」

何となく、そんな事を口走ってしまった。
どうしてだろう？

「不老不死…それなら心配するな。君は既に不老不死という名の？ゾンビ？だ」

…は？
どういう事？

「君を生き返らす時に、普通に蘇生させたんじゃないから、ゾンビという名の、おまけ付きで蘇らせた」

他人事のようにと言うか、人のことを弄んでいやがると言うか。訳分からん。

…ゾンビか。

そういえば、ライトノベルにゾンビが主人公の奴があったな。

ちょうど、良いや。

「だったら、俺を…」

「言わなくても良い。心を読んで分かった。あるラノベの主人公のようにして欲しいのだな」

「あ、ああ。出来るか？」

「容易い」

星伽さんがそう言うのと、手を俺の方に翳す。すると、星伽さんの手が光りだした。

「な、何だ？」

流石の俺も驚く。

そして、徐々に光りが消え始めた。

「今、君に相川歩という主人公と同じ力を上げたのさ。おまけに、魔法少女にもなれるようにしてやった。魔法錬器無しでだ。嬉しいか？」

ま、魔法少女だと…！？

あんな、変態女装野郎になっちまうのか…！

魔法少女が分からない人への簡単な説明。

魔法少女の様な衣装姿に変身し、強くなる。

それだけだ。

ただ、男が変身すると、見事なまでに醜く、気持ち悪い姿になる。

「余計な事してんじゃねえ！」

「で、他には何か無いのか？」

俺のセリフが完全にスルーされた。

まあ、別に良いか。

女装する代わりに強くなれるんだし。

「ん〜と、じゃあ、色んな武器を出せるって奴はどうかかな？」

「色んな武器？　？武器を発現する程度の能力？　ってどこか？」

「うん。そんな感じの奴で」

何か、適当な感じになってきたな。

そして俺は、星伽さんから二つ目の能力を貰う。

「それじゃあ、最後に何か欲しい能力とか有るか？」

んゝ正直無いな。

これと言って。

「そうか、分かった。では、勝手に私が決めておく。じゃあ、そろそろ君には幻想郷という世界に行ってもらおうか」

お好きに何でもどうぞ。

ってか、もう口に出して話さなくてもよくなったな。

「ああ」

すると、いきなり俺の意識が曖昧になってきた。

眠い。

そんな感覚。

「次に君が目を覚ます時は、幻想郷という幻想的な世界だ。君はそこで第二の人生を送る。良いな？」

目が霞んでくる中、星伽さんが話しかけてくる。

「それと、君を蘇生させた時、ちょっと？厄介な者？と一緒に蘇ってしまったから気を付けろよ。そいつは先に幻想郷に送りつけたが」

「は？ 何だよ、それ!？」

俺は朦朧とする意識の中、星伽さんに聞く。

「確か、？和永暗人？と名乗っていたな。まあ、心配するな。君の心の闇のような物だ」

気にするよ！？

何だよ、もっと早く言えよ！

「それと最後に一つ。まだ、君の名を聞いていなかったな。何と言うんだ？」

最後に聞くことじゃ無いよなそれ。

俺は倒れる寸前に答える。

カズナガアキト
「和永明人」

俺の意識は、ここで途絶えた。

キャラ頁【オリキャラ紹介】

カスナガ
和永 明人

性別…男

年齢…16歳

職業…高校生

身長…172cm

性格…優男で、歳相応に妄想したりする。超バカ。

外見…髪の色は薄茶色で、少し死んだ目をしている。

能力…武器を発現する程度の能力。

特異体質…不死であり、身体が破損しようと再生できる。魔法少女のような変身をする。

ある日、美人さんに目が暮れ、美人さんの方を見ていたら車道に出
てしまい、気付けばダンプカーに撥ねられ死んでしまった超バカな
高校生。

そんな彼は、天国で第二の人生を過ごすと思いきや、第二の人生を
幻想郷で過ごす事となった。

高校生、和永明人の第二の人生が此处で始まる。

ホシトギ
星伽 夜歌

性別…女

性格…胡散臭い風貌で、何を考えているか分からない。

外見…紫の長髪で、巫女のような服装をしている。

能力…能力を作り出す程度の能力。心を読む程度の能力。生物を完
全蘇生させる程度の能力。などなど。

詳しい詳細は不明。

バカな死に方をした主人公を助けてくれた女。

目的は物語の作成。

能力を複数所持しており、主人公を死から生きかえらし、幻想郷に移転させた張本人。

カズナガ
和永 アント
暗人

身長…172cm

性格…主人公とは正反対で非道・好戦的。主人公と違ってバカでも変態でもない。

外見…髪の色は白色で、狂気の眼光を常に湛えている。

能力…武器を発現する程度の能力

特異体質…不死であり、身体が破損しようが再生できる。

夜歌の能力で主人公が復活すると共に、新たに生まれた人間。

主人公より先に幻想郷に行き、行方は不明。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9000y/>

東方屍生記

2011年12月1日22時55分発行